

全国障害者問題研究会編  
 ともに、つなげ、  
 ひろげる  
 一東日本大震災と  
 私たち—  
 早瀬 憲太郎  
 『生命のことづけ』 『ゆずり葉』  
 映画監修

図書紹介

今、風がたなびている。優しく頬をなでて身体のかたどるようになきぬけていく。あれほどに心地よかつた風も翌日には何事もなかつたように日常生活に埋没されていく。時には大嵐のように何もかも吹き飛ばすような風の日。それもまたいつかは忘れられていく。「風化」という言葉はまさにその通りなのだ。本書を読んで、これほどまでに恐ろしいことだと実感したことはない。「人間は忘れる生き物」と誰かがいった。それは1つの真理かもしれないが「人間は忘れることができない生き物」であ

を防ぐためには、まずは当事者自身が発信していかなければならぬ。それがどれだけ難しく大変なことなのか、私自身、障害をもっているからこそ痛いほどよくわかる。自分自身の障害とはどういうものなのか？をきちんと説明できる障害者は実のところ決して多くはないのだ。ましてやその障害がゆえに起きる様々な差別や困難な状況を、理路整然とまとめて発信するといふことは非常に難しい。さらに東日本大震災という忘れたいけれども忘れられない心と身体に刻み込まれた大きな傷跡、そして今も続く後遺症を社会に向けて発信していくことは並大抵のことではない。しかし、発信しなければあつという間に風化され忘れられてしまふ、いつかまた悲劇は繰り返される。障害者達は決して自分たちのことを理解してもらいたいわけではない。ただ知ってもらいたい、共感してもらいたい、そして次の世代の障害をもつ子

ることもまた真理ではないだろうか。

本書は、東日本大震災から今にいたる障害者のリアルな姿を時系列にまとめられている。

あれほどの災害の中を生き抜いた人達が、果たして、それを忘れることなどありえるのだろうか？その一方で、

距離にいる人達にとつては、2年半たった今、忘れないまでも風化してきているのは確かだろう。決して忘れられない人達と、もはや風化しつつある人達との間には、たとえようもない大きな隔たりがある。だから本書は訴える。被災地の人々の思いと今願っていることを、ともにつなげ、ひろげて、思いを共感しあえることができればと。

障害者と一口に言っても視覚障害者、肢体不自由、知的障害、聴覚障害などたくさん障害があり、一人ひとりの障害の程度や背景、環境が全く異なる。その障害者達が、東日本大震災の瞬間

にどのような状況にいたのか、そしてどの

のように生き延びることが出来たのか、また今も続く被災の状況とは何なのか、これら全ての疑問を解き明かすように一人ひとりの障害者と彼らを取り巻く支援者の生の声が載せられている。

災害が起きたから大変なのではない。災害が起きるもつと前から、ほとんどの障害者に対する福祉施策や環境、支援システム、など内包されている問題が今回の大震災で見える形として明らかになっただけである。本書をとりまとめた全国障害者問題研究会は、障害者の権利を守り、発達を保障するために活動をしている団体だ。本書はI部、II部にわかれており、I部には毎月発行している全障研さんの、大震災から今までの記録がまとめられていて、障害者の現実の姿を、彼らの生の声を、しっかりとらえて発信している。

当事者でない人達に怒りが寄る「風化」

いる障害者の問題が、わかりやすく整理されているのだが、とりわけ東日本大震災で亡くなった障害者について触

れているあたりは衝撃的だ。

障害者の死亡率が東日本大震災で亡くなった人の数から考えて約2倍であったことがわかる。なぜ2倍なのか？法律により基本的な権利を保障されているはずの障害者が、なぜ、これほど多く命を落としてしまったのか？今後障害者の命を守るためにはどうすればよいのか？その答えは、残念ながらまだ誰も手にしていないが、そのヒントとなるものが本書のI部の障害者達の生の声の中にかくされている。

まずは知ってほしい。そして共感してほしい。同じ風が二度と吹くことはない。同じ風が吹くことは決してない。いつかまた風は吹く。その風をどうかしたつかりと感してほしい。今日の風はどんな風でしたか？

（全国障害者問題研究会 価格 一、五七五円）